



Title	Valle-Inclán, その習作時代
Author(s)	堀内, 研二
Citation	Estudios Hispánicos. 1979, 5, p. 65-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93583
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Valle-Inclán, その習作時代

堀 内 研 二

はじめに

本稿の目的は Valle-Inclán の出生から処女短編集 *Femeninas* 『女性たち』(1895)出版に至るまでの時代を整理し紹介することである。この文学形成の時期における作家の故郷ガリシアでの生活体験及びそこでの教育、文学的雰囲気、習作等について検討することは、この特異な審美感覚を備えた作家を理解する上で重要であると筆者は考える。

筆者はここ数年 Valle-Inclán の前期作品に接する中で、いくつかの作品研究を発表してきた。¹⁾これらは *las Sonatas* 『四季の曲^{ソナタ}』四部作、*Flor de santidad* 『聖なる花』、*Jardín umbrío* 『仄暗き庭』、*Comedias bárbaras* 『野蛮劇』等のいずれも20世紀初頭に書かれた作品に関する研究であり、19世紀末の Valle の文学形成期の習作的な作品についてはこれまで触れる機会がなかった。

本稿が Valle の前期作品の理解にささやかなりと役立てば幸いである。

この時期の Valle の人と作品については、M. F. Almagro の *Vida y literatura de Valle-Inclán* ²⁾、R. Gómez de la Serna の *D. Ramón María del Valle-Inclán* ³⁾、Valentín Paz-Andrade の *La anunciación de Valle-Inclán* ⁴⁾ 等の著書が詳しく触れているので、これらを参照しながら、このガリシアの作家が文学者として本格的に創作活動を開始するに至るまでの過程を追ってみたい。

1. 出 生

Valle-Inclán は1866年10月28日⁵⁾、ガリシア地方のポンテベドラ県の Ría de Arosa 沿いの小さな町ビリャヌエバ・デ・アローサに生まれた。⁶⁾ Ría はイスパニアではガリシア地方特有の海岸の様相で、海岸が浸食により陸地深くまで入り込んでいるもので、我々にはリアス式海岸という言葉で馴染の深いものである。Ría de Arosa はガリシア地方南西部海岸の Ría de

Muros y Noya と Ría de Pontevedra の間に位置しており、ビリャヌエバ・デ・アローサはちょうど半分位陸地に入り込んだところの南岸にある小さな港町である。

Valle の父は don Ramón Valle Bermúdez, 母親は doña Dolores Peña y Montenegro で、彼はこの夫婦の次男であった。don Ramón は同じくモンテネグロ家に通ずる先妻との間にひとりの娘 Ramona を儲けているが、二度目の結婚からは上から順に Carlos, Ramón, Francisco, María の三男一女が生まれている。⁷⁾

我々の Ramón Valle は Ramón José Simón と名付けられた。Ramón は父親の名前、José は教母及び母方の祖母の守護聖者の名、Simón は彼の生まれた日の聖者名からとったものであった。⁸⁾

Ramón Valle Peña の父方の祖父母の家柄も母方の祖父母のそれも、いずれもガリシア地方では各門であったらしい。彼が特に誇りとしていたのは母方の祖母の家柄、つまりモンテネグロ家で、後に彼が創造する人物の中でもブラドミン侯爵⁹⁾と共に重要な老郷士 don Juan Manuel Montenegro の口をつかい、Valle は次のように自慢している。

「われらガリシアのモンテネグロ家のものは、ドイツのさる皇后の末裔である。金属の上に金属が重ねてある、イスパニアでは唯一の紋章をもっておる。つまり銀の地金に金の拍車じゃ¹⁰⁾

後年 Ramón Valle はこの没落した豪族の一家に想を得て、悲喜劇 *Comedias bárbaras* 三部作 (1907, 08, 22) を書き上げる。

また、Rosalía de Castro の夫であり Valle の父親の親友で、ガリシア文学にも造詣の深かった歴史家 Manuel Murguía (1833~1923) は、Valle の処女短編集 *Femeninas* に寄せた序文の中で、Valle の家柄の高貴さを次のように表現している。

「血統のよさが重荷にはならず、むしろ大事業へと駆り立てる刺激となった栄えある一族の末裔である彼は、果たすべき二重の義務を背負っている。そのむかし、彼の家からは偉大な軍人やすぐれた学者、文学者が輩出し、それはこの哀れなるガリシアの誉れであり誇りであった」¹¹⁾

Valle は祖先から受け継いだこのような気高い家名をたえず誇りとし、その大部分清貧に甘んじた生涯を通じて貴族らしい気位を保持した。しかし、貴族の称号は何ら受け継いではおらず、後年 Valle 侯爵, Vieixín 子

爵、さらに Caramiñal の領主の称号を求める訴訟をおこすが、むなしい結果におわっている。¹²⁾

2. Valle 一家の文学的雰囲気

Ramón Valle が文学を志すようになったのは、その少年時代における一家の文学的環境と無縁ではない。彼の父 don Ramón は「博学で有名で頑固なまでに一本気の人物で詩人」¹³⁾であった。若い頃は水先案内人として船に乗り、後には内務省の役人、さらにポンテベドラ県庁の書記官となるが、¹⁴⁾ 自ら数年にわたり La Voz de Arosa なる新聞を刊行し、またサンティアゴ・デ・コンポステーラで行なわれた詩のコンクールでは入賞の榮譽に浴するような人物であった。また兄の Carlos は Valle の処女作が現われる前年の1894年、カスティーリャ語とガリシア語による詩集 *Escenas gallegas* 『ガリシアの情景』をポンテベドラで出版している。

さらに、Valle の身近かには Francisco del Valle- Inclán¹⁵⁾ から受け継いできた蔵書があり、その中から Cervantes の『ドン・キホーテ』や『模範小説集』、Chateaubriand の『アタラ』、『ルネ』、『墓のかなたからの回想』、また中世の叙事詩『わがシッドの歌』等を愛読したらしい。¹⁶⁾

3. 少年時代の Ramón Valle

Ramón がどのような少年であったか知るために、次に M. F. Almagro の文章を引用しよう。

「のっぽで骨張った体格で活発な少年 Ramón Valle の内的世界には空想やあこがれが多く巣食っていた。彼は周囲にあるものよりも、目に見えないものを信じ、また、自らを放浪者と思い込み、あてのない遠出に身をまかせることが好きで、乞食や運送人夫との会話の機会を捜し求めた。あるいは海を眺め、まだ見ぬ新大陸へと通じる泡の道に思いを馳せた。彼の両親は息子の扱いにくい、気まぐれな性格に心を痛めた。——中略——。

Ramón は肉体的疲労は感じないたちで、心の内は慎しみ隠し、また、驚くべきほどの強記ぶりを発揮した」¹⁷⁾

おそらくはこの通りの少年であったろう。目に見えないものへの関心は単に Valle だけでなく、超自然の世界に目を向け幻想を友とするケルト系のガリシア人特有のものであるが、Valle の少年時代は迷信、奇蹟、神秘といったものに激しくゆさぶられる。¹⁸⁾ 彼の屋敷の召使であった Micaela la Galana から「聖者、亡魂、ドゥエンデ、盗賊等の物語」¹⁹⁾ を聞い

て育った Valle は、それらの「無邪気で悲劇的な神秘に満ちた物語」²⁰⁾ ゆえに、少年時代を通じて心臓のちぢみあがるような恐ろしい夜を体験することになる。そして、強烈な印象となって心の内に残ったこれらの物語の思い出は、後に短編集 *Jardín umbrío* (1903) となって結実するし、その他の作品においても迷信的、神秘的要素が多く現われる。²¹⁾ また、Ramón Sender が紹介している宝捜しの挿語にみられるように、老年に達した Valle の実生活にも影響を及ぼしていたらしい。²²⁾

さらに、彼の作品によく登場する乞食や放浪の人々をはじめとする下層民の描写は、この時代の観察がもとになっていようし、海のむこうの世界への憧れは、青年 Valle をして未知を表わす文字である X で書かれる México へとむかわしめることになる。²³⁾ また、彼の記憶力のすばらしさは、たとえば先にあげた *Jardín umbrío* 中の諸短編を読めば明らかなように、少年時代に見聞したことの鮮やかな描写となって後にあらわれてくる。

少年 Valle の腕白ぶりについては、古いサーベル片手に、ちょうど架空の敵にむかうドン・キホーテのように、メロン畑に襲撃をかけたり、²⁴⁾ また、造成中の墓地から出てきた^{どくろ} 骸骨をサッカーのボール代わりに蹴って遊んでいた²⁵⁾ というような挿話が伝えられている。

4. Ramón Valle と教育

Ramón の最初の教育は生地ビリャヌエバ・デ・アローサで始まった。そこで彼は司祭を個人教授としてラテン語の勉強を始めた。*Jardín umbrío* 中の *Mi hermana Antonia* 『わが姉アントニア』には「昼はラテン語、夜は死者への恐怖といった幼年期の陰鬱な鎖が重くのしかかっている子供の頭」²⁶⁾ 云々の文章が出てくるが、先に述べた神秘の世界と共に少年 Valle の心を捉えて離さなかったもうひとつのものがラテン語の学習であつたらしい。しかし、彼は「勉強好きでおとなしい少年というよりはむしろひねくれた、注意力の散漫な少年」²⁷⁾ であつたから、学習の効果はあまりあがらなかったものと思われる。同じ短編集中の *Nochebuena* 『クリスマス・イブ』には、その頃の様子がもう少し詳しく描かれている。Ramón はラテン語の活用を覚え込まないと罰として夕食はあげないと司祭に言われるが、早々と勉強は諦めてしまい、断食の覚悟を決め、司祭館の窓からぼんやりと植込みの小鳥や鉛色の空、さらには遠くの牧童や羊の群れを眺めるような少年であつた。²⁸⁾

1877年7月28日、Ramón はビリャヌエバ・デ・アローサで中等学校に入る試験を受ける。そして、ポンテベドラとサンティアゴの学校で学び、1885年4月29日卒業している。²⁹⁾

ポンテベドラでは父親の紹介でその学校のラテン語教授 Jesús Muruais の家に出入りし、すでにそのすばらしい蔵書に接し始めていたらしい。³⁰⁾以後 Valle はここを通じ新しいヨーロッパ文学を知りその初期の文学形成のための素養を培うことになるが、これについては後に章を改めて触れることにしよう。

しかし、学業にさして特別の関心を示さなかったことは、「イスパニア史」での Notable、「修辞・詩学」の Bueno 以外の科目のすべての評点が Aprobado で、また「ラテン語・カスティーリャ語」と「算術・代数」の二科目において単位を落としていることから推察できよう。³¹⁾

中等教育を終えた Ramón Valle は軍人になる希望を一時抱くが、軍隊では上官の命令に服さねばならぬと論され、父親の望む弁護士のコースを目指すようになる。³²⁾

1885年9月、サンティアゴ大学の法学部に籍を置くことになるが、その頃はまだ試験は受けず、1887年になってから「形而上学」と「イスパニア史」で Notable を取り、1888年1月には「イスパニア文学」で Aprobado、さらに「自然法」と「経済学」ではそれぞれ Aprobado と Bueno の評点をとる。1889年5月には「ローマ法」と「公教法」で Aprobado を取るが、「国際私法」を落とした。同年9月には「国際公法」の単位は取るが「財政法」を落としている。³³⁾

この学業成績から Valle が依然としてよい学生ではなかったことが明らかにされるが、法律関係の科目はいざ知らず、カスティーリャ語や文学においてあまり成績ががんばりしかなかったことはおもしろい。

5. *A media noche* 『真夜中に』

Valle の最初の小品はサンティアゴ大学の学生時代に現われる。しかし、詩人としての目ざめは大学時代よりも前に経験している。少年 Valle の学校を訪れた José Zorrilla から彼の将来を言いあてるかのような「君もまた詩人かね？」という質問を受けたことがあるが、Valle はその時について次のような回想を行なっている。

「ぼくにはその言葉が真に是認を意味するものと感じられた。詩人かっ

て？そうとも。ぼくにはすでに事物の奥底にある悲しみを見分けられたし、月と語り、また、薔薇が女性であった頃の魅力を秘めていることを発見し始めていたのだから」³⁴⁾

1889年1月、Valle はバルセロナの新聞 *Ilustración Ibérica* に短編 *A media noche* を送っている。この小品は *Femeninas* の出版以前にマドリードやメキシコ市の新聞に発表される数多くの短編小説、批評記事、詩等の作品の最初のものとなる。³⁵⁾ 後にこの作品は *Jardín umbrío* や *Jardín novelesco* 『小説風の庭』(1905)中に加えられ出版されることになる。

ポルトガルから戻ってきた亡命者らしい馬上の主人とその馬丁が人目を忍びつつ夜道を駆ける。仲間のもとに行くらしい。途中彼らは追いはぎに襲われるが、主人は相手を即座に射殺してしまう。内容はこのような他愛もないものだが、この小品には後の Valle の作品の特徴のひとつをなす神秘的かつ暴力的な雰囲気すでに漂っている。

6. マドリードへ

1890年、Valle の父 don Ramón Valle Bermúdez が死去する。弁護士になるよう法律の勉強を勧めた父親の死は、大学での単位修得が思うようにいっていなかった Valle に学業の中断を決意させることになった。³⁶⁾

1891年 Valle はマドリードに出た。この年は A. Ganivet や Unamuno がそれぞれグラナダ大学、サラマンカ大学の教授任用試験に挑んだ年である。彼ら三人はほぼ同年令であるが (Unamuno 64年, Ganivet 65年, Valle-Inclán 66年生まれ), ふたりの先輩が大学時代からの俊英として難関に挑むのに対し, Valle はボヘミアンよろしく首都の街を徘徊する。何という相違か！

Valle の首都での生活についてはあまり知られていないが, Juan Antonio Hormigón によれば, 友人のある者たちのように自由派あるいは保守派に接近したりすることなく, 両者から独立の立場をとっていたとのことである。³⁷⁾

Valle は E. Castelar の主宰する新聞 *El Globo* に *A media noche* を再発表し, さらに6つの記事とふたつの短編を1891年7月31日から翌年2月1日にかけて発表する。³⁸⁾ これらは5ヶ月間にわたる Valle の首都滞在中にすべてが発表されたのではなく, あるものはメキシコへの旅立ちの準備のために戻ったポンテベドラから *El Globo* に送付された。³⁹⁾

7. メキシコへの旅

1892年春、Valle はメキシコに旅立つ。彼が出発した日時や港について多くの伝記作家は触れていないが、Paz-Andrade は1892年3月12日付のポンテベドラの新聞 *Faro de Vigo* がこの出発の記事を扱っていることを根拠に、同日ポンテベドラ近くの港マリンからフランス船 *Le Havre* にて出発したとしている。⁴⁰⁾

Valle は4月8日ベラクルスに到着する。航海中に彼は当地の新聞 *El Veracruzano Libre* を発行するアストゥリアス人と面識をもち、そこで働くことになった。⁴¹⁾

M. F. Almagro は下船したばかりの Valle がひきおこしたという次のような挿話を紹介している。

たまたまベラクルスの別の新聞の中に、エルナン・コルテスをはじめとし、着いたばかりの者に至るすべてのイスパニア人を嫌悪するという内容の記事を見い出した Valle は、到着したばかりの自分のことを言っていると思い、その新聞の編集局に乗り込み釈明を要求する。しかし、そこに居あわせた編集者たちは数をたのみにし Valle に襲いかかり、彼を通りに放り出す。だが機転を働かせ彼は別の入口から侵入し、ステッキをかざして彼らに打ちかかる。不意をつかれた一同は部屋から逃げ出すはめになった。⁴²⁾

これは Valle が自慢げに語ったものらしいが、後に現われる Valle の多くのファンタスティックなつくり話同様、そのまま信ずるには価しない。しかし、彼の気質の一端をよく表わしている挿話といえよう。

Valle はメキシコにおいて最初前述の新聞 *El Veracruzano Libre* で働き、後にメキシコ市に移り、*El Universal* 紙に協力する。彼は後者の紙上に *Zan el de los osos* 『熊つかいサン』(1892, 5), *Caritativa* 『慈悲深い女』(1892, 6), *El canario* 『カナリア』(1892, 6), *La confesión* 『告白』(1892, 7), *¡ Ah! de mis muertos* 『ああ、わが今は亡き人々よ!』(1892, 7)をはじめとする多くの短編や記事を発表するが、⁴³⁾ 残念ながら筆者の手許にはこれらの小品はない。しかし、*Caritativa*, *La confesión* は *Femeninas* 中の *Octavia Santino* 『オクタビア・サンティーノ』に、また *El canario* は同短編集集中の *La generala* 『將軍夫人』に加筆修正されてなるということだから、⁴⁴⁾ おそらくそれらの短編は後で

詳しく触れるはずの *Femeninas* 6編と同傾向のものと考えてよいであろう。

Valle はこの最初のメキシコ旅行⁴⁵⁾ において、彼の初期の作品を特徴づけるモデルニズムの影響を Díaz Mirón, José Othón, Gutiérrez Nájera 等ルベン・ダリーオの運動を補完するメキシコの作家たちの著作から受けたらしい。⁴⁶⁾ かの地で Valle がどのような生活を送っていたかについてはどの伝記作家も触れていないので知るよしもないが、あこがれの地の生活を通じて Valle が激しくその創作意欲を刺激され、作家としての確固たる自覚をもってイスパニアに戻ったであろうことは、帰国後の活発な創作活動からして想像するにかたくない。

Valle は1893年春、約1年間にわたるメキシコ滞在ののちガリシアに戻った。

8. Jesús Muruaisの蔵書と Valle

先に Valle がポンテベドラの中等学校時代ラテン語教授 Jesús Muruais の家に入りし始めたことに触れたが、メキシコから戻った Valle は再びポンテベドラの彼の家に通い、その蔵書を読み漁ったり、文学サロンに加わったりする。⁴⁷⁾

Valle の通った家は Casa do Arco (アーチの家) と呼ばれ、かつては Andrés と Jesús という Muruais 家の兄弟が住んでいた。どちらも博学で有名であった。特に Valle の父の友人でもあった Andrés はすばらしい才能の持ち主であったらしいが、1882年、31才で夭折している。この死に際しては Valle の父をはじめとし、Rosalía de Castro, la Pardo Bazán, Curro Enríquez, Pondal 等、当時のガリシアの文学を代表する作家たちが追悼詩集を出している⁴⁸⁾。兄の死後、3才年下の Jesús はその遺志を受け継ぎ、蔵書を管理し、その豊かな批評精神でもって当地の多くの知識人をその家にひきつける。

Casa do Arco の書庫にはガリシア出版の書物、イスパニアの古典やロマン派の書物、自然主義、フランスの象徴主義、高踏派の文学、モデルニズムの文学、イタリアの詩等の書物、さらに当時ヨーロッパで刊行されていた最新の権威ある美術、文学雑誌が集められていた。⁴⁹⁾

Valle はこれらの蔵書の中から Eça de Queiroz, Chateaubriand, Flaubert, Bourget, Barbey d'Aurevilly, Maupassant 等の散文、

D'Annunzio, Guerra Junqueiro, Baudelaire, Verlaine 等の詩に接するようになる。⁵⁰⁾ これらポルトガル, フランス, イタリアの作家たちの作品から得たものは, 彼がメキシコ旅行でつかんだものと共に, Valle の初期の作風の形成に少なからず影響を及ぼすことになる。

9. *Femeninas* の出版

1895年, Valle は6つの短編からなる最初の本 *Femeninas* をポンテベドラで出版する。彼がメキシコにおいてすでに短編集の出版を計画していたことは, かの地から1893年3月2日付の Manuel Murguía 宛ての書簡で序文を頼んでいることからして明らかである。⁵¹⁾

イスパニアに戻った時, Valle は旅行中に書き集めた短編をたずさえていた。それらの中には *La generala* (1892, 4, Le Havre 船上), *Octavia Santino* (1892, 7, メキシコ), *La condesa de Cela* 『セーラ伯爵夫人』 (1893, 1, ベラクルス), *La niña Chole* 『ラ・ニニャ・チョーレ』 (1893, 4, パリ) があった。この最後の作品のパリでの制作については, M. F. Alma-gro は Valle が帰国の際そこに寄らなかったであろうことを理由に, 否定的な見解を述べているが,⁵²⁾ Paz-Andrade は1週間以上にわたる Le Havre 寄港中に「落ち着きのない旅行者」 Valle がパリにまで足をのびしたのではないかと考え, 暗に認めている。⁵³⁾

この4編に帰国後書き上げた *Tula Varona* 『トゥラ・バローナ』 (1893, 9, ポンテベドラ) と *Rosarito* 『ロサリート』 (1894, 4, ビリャヌエバ・デ・アローサ) が加えられ, *Femeninas* という題名のもとに出版されることになった。発行者はポンテベドラの印刷業者 don Andrés Landín で, この本は Valle の大学時代の友人 Pedro Seoane に献呈されている。なお, この書物において初めて Ramón del Valle-Inclán というペンネームが用いられている。

10. *Femeninas* のあらすじ

ここではそれぞれの短編の紹介をしてみたい。

第1作 *La condesa de Cela* はイスパノアメリカからやってきた放蕩者の学生 Aquiles Calderón とセーラ伯爵夫人 Julia の道ならぬ恋の結末の様子が語られる。

母親の懇願を受け, Julia は夫のもとに戻り子供たちの世話をしようと決意し Aquiles のもとを訪れ, 別れ話を持ち出す。彼女がそれまでに彼に

宛てて出した手紙の返還を求めると、Aquiles は悲しみに沈みながらもそれに同意するが、彼女がいざ手紙を暖炉の中に投げ入れると火の中からその一部をとり出し、かたみに残しておいてくれるよう頼む。考えぬいた末、夫人はそれを与えようとするが、すねた Aquiles は今度は受け取らずむせび泣く。若い情人に対し変わらぬ愛情を抱く夫人は感動し、彼をベッドに誘う。ベッドの中で Aquiles は先ほどの冷たい仕打ちの仇をとるべく、彼女が聖女と仰ぐその母親の若い頃の浮いた風評を仄めかす。これに立腹した夫人は、永遠の別れを告げ部屋から去る。

第2作 *Tula Varona* はこの名の criolla の残酷な恋愛遊戯の物語である。

夫と別居中の Tula Varona は狩猟から戻ってきた貴公子 Ramiro Mendoza に接近し、思わせぶりの態度で彼を自分の家に誘う。そして彼を歓待し、コケティッシュな振舞いで若者に激しい欲情を催せる。しかし、抑えきれなくなった Ramiro が彼女に口づけようと迫ると荒々しくこれを拒絶し、召使に命じ彼を家の外に追い出させる。そのあと、衣服を脱ぎ去り、その軀を鏡に写し自らの美しさにうっとりし、勝利の快感に酔い痴れる。

第3作 *Octavia Santino* は若い愛人のもとに走ったある夫人の悲劇的結末の物語である。このテーマは Valle のお気に入りであつたらしく、何度も書きかえられ発表される。一番最初の形はメキシコの El Universal 紙に発表された *Caritativa* (1892,6)。次に *La confesión* (1892,7)、これはそのまま *Octavia Santino* になっていると思われる。さらに1899年にはこれを戯曲化し、*Cenizas* 『灰』を書き上げ、1908年にはさらにこれを改作し、戯曲 *El yermo de las almas* 『魂の荒野』ができあがる。

自らの恋のために夫と子供を投げ出し若い愛人のもとに走った Octavia は肺病で病床にある。同棲中の Pedro Pondal がその看護にあたっているが、彼女は自分の死後、Pedro に自分の思い出にとらわれず自由に生きて欲しいという深い愛情から、彼を裏切ったことがあると嘘の告白をして死ぬ。

第4作 *La niña Chole* はメキシコを舞台に旅先で出会った魅惑的で残忍なユカタンの女性をめぐる回想の物語である。この作品の主要な部分は後に *Sonata de estío* 『夏の曲』(1903)の中で用いられることになる。

恋の傷手を癒そうとメキシコへの旅に出た「私」はメリダのホテルで、イギリス人の夫と食事中的エキゾチックな女性 *la niña Chole* を見かける。彼女の中に別れた恋人の面影を見た「私」は、古代アステカの巫女のようなその女性の不思議な魅力の虜となる。「私」は追いはぎに襲われ、これを撃退するという冒険のあと船に戻るが、同じ船に *la niña Chole* たちが小舟で漕ぎ着けてくる。「私」はその偶然を喜ぶが、彼女が夫の黙認のまま、米国の男性に色目をつかっているのに嫉妬し、憤慨する。また、彼女は金を与える約束のもとに、黒人に海中に潜り、鯨を殺してくるよう頼む。黒人は鯨の群に海中に引き込まれるが、彼女は平然と微笑を浮かべるだけである。この光景に「私」は戦慄を覚えるが、残忍ながらも魅惑的で官能の権化のような *la niña Chole* に強くひきつけられる。

第5作 *La generala* は老齢の退役軍人と結婚した若い女性の軽薄な恋愛遊戯の物語。これは1892年4月、メキシコに向かう途中の *Le Havre* 号の船上で書いたとあとがきにあるが、1892年6月、*El canario* の題名で *El Universal* 紙上に現われている。

若妻 *Currita* は健康を理由に夫にタバコを禁じ、客のある時のみ許可するが、夫は部下の *Sandoval* を毎日のように食事に招き、タバコを吸う口実にする。しかし、この若者は *Currita* のお気に入りになってしまう。ある日、部屋でふたりっきりになり口づけを交しているところに夫が戻り、扉を激しく叩くが、彼女は機転を働かせ、カナリアが逃げたから扉は開けられないと言ってその場をとりつくろう。

第6作 *Rosarito* では *Valle* の作品に初めて登場する *don Juan Manuel Montenegro* の無頼ぶりと、前五作のヒロインたちとは対照的に「ほんのわずかな恋の気配にも含羞草^{おじぎそう}のように身をちぢこませる」⁵⁴⁾ *Rosarito* の繊細さ及びその悲劇的な死が描かれる。前5作では夫をもった女性の若い男性との関係が扱われたが、この作品では、そのようないわゆる反道徳的な要素は影をひそめている。8年後 *Jardín umbrío* 中に多少の書き替えののち加えられるが、そこにみられる短編と同様の神秘好みの傾向の色濃い作品である。なお、*Rosarito* のあらすじはすでに触れる機会をもったのでここでは省略する⁵⁵⁾。

11. *Femeninas* にみられる影響

ここでは *Víctor Said Armesto* と *M. F. Almagro* が行なっている

Femeninas にみられる影響についての考察を紹介したい。

Said Armesto は *Femeninas* 出版の1年数ヶ月後の1897年、*Análisis y ensayos* 『分析とエッセー』と題する評論集を世に出すが、この中に *Un libro modernista* 『あるモデルニズムの本』という評論がみられる。これは *Femeninas* に関する最初の研究で、この短編集を理解する上で貴重な示唆に富んでいる。

この中で彼は *Femeninas* にみられる影響について次のように書いている。

「Ramón del Valle-Inclán は *Femeninas* において、多くのフランスの同時代作家の強い影響を受けて登場する。彼は近代建築の礎石を彫り刻んだ、ほとんどすべての芸術家の作品を、心地よい快感にひたりながら読み、Paul Bourget の心理的手法、Barbey d'Aurevilly の特異な心理及び感覚の焼直し、Daudet の絶妙な構成力と形式、Guy de Maupassant の力強く簡潔な肉付け、さらに Pierre Loti の繊細な異国情趣の多くを驚くばかりに消化吸収している」⁵⁷⁾

そして、さらに具体的に言及する中で、*La condesa de Cela* は Bourget の *Cruelle énigme* 『むごい謎』(1885)、*Une crime d'amour* 『恋の罪』(1886) 両小説、*Rosarito* は d'Aurevilly の *Une histoire sans nom* 『題名のない物語』(1883)、また *Tula Varona* は Bourget の *Mensonges* 『嘘』(1887) の影響を受けているとし、また Maupassant の *Fort comme la mort* 『死の如く強し』(1889) の影響が *La condesa de Cela* の主人公たちの密会や *Octavia Santino* のヒロインの死の苦悶にあらわれていると考える。⁵⁸⁾

Fernández Almagro は *Femeninas* がテーマと用語において Maupassant, Eça de Queiroz, D'Annunzio, Barbey d'Aurevilly 等の作家の作品を想起させるとしている。⁵⁹⁾ その中でも Jesús Muruais がとりわけ好んでいた初期の D'Annunzio と Barbey d'Aurevilly の作品が Valle の関心をひいたとしても不思議はないと考える。⁶⁰⁾ D'Annunzio については、「最後のロマン派の色男と最初の妖婦が、庭園、サロンもしくは書斎で求めあい、はねつけあい、また愛しあい憎しみあう」⁶¹⁾ といった *Il piacere* 『快楽』(1889) の世界を *Femeninas* が想起させると考える。また、Barbey d'Aurevilly については、彼の作品 *Les diaboliques* 『レ・ディアボ

リック』(1874)が女性と愛、迷信と神秘を文学化しようとする Valle の芸術的願望に影響を与えたとしたあとで、*La generala* の主人公 Sandoval が作品中で行う *Lo que no muere* [*Ce qui ne meurt pas*]『死せぬもの』(1884)への賛辞、*Rosarito* における天上的なものと悪魔的なもののコントラスト、*carmesí* (緋の) という形容詞の濫用、さらに *Femeninas* の構成が *Les diaboliques* と同じ6つの短編からなっている点を、この *connétable des lettres* (文学の総帥) の影響としてあげている。⁶²⁾

12. *Femeninas* の文体

この章では作品に具体的に触れる中で、Valle のこの時期の文体を明らかにしたいと思う。

Valle の初期の作品の文体について考察している Julio Casares は、*Femeninas* 中の *La generala* の文体の特徴としておおよそ次のようなものをあげている。

a) 文体には特異なものは何もない。同時代のイスパニアの作家たちと同じである。

b) この散文は平板である。語彙の平凡さ、構成のありきたりさ、挿入・間投詞の頻出、これらすべては日常会話に近い調子をかもし出す。また、文は比較的長い。

c) 短編全体にはおそらく半ダースの隠喩もないだろう。直喩も貧弱で詩趣に欠ける。⁶³⁾

彼はこのようにどちらかというと批判的な結論を述べている。この見解を考慮に入れながら、以下、筆者なりの文体の考察を行ってみたい。まず、*La condesa de Cela* から文章を引用しよう。

① Aquiles Calderón era un muchacho americano, que había salido muy joven de su patria con objeto de estudiar en la Universidad española de Brumosa, donde al cabo de los años mil continuaba sin haber terminado ninguna carrera. ② En los primeros tiempos derrochaba como un príncipe, mas parece ser que su familia se arruinara años después en una revolución, y ahora vivía de la gracia de Dios. ③ Pero al verle hacer el tenorio en las esquinas y pasear las calles desde la mañana hasta la noche, requebrando a las niñeras y pidiéndoles nuevas de sus señoras, nadie adivinaría las torturas a que se hallaba sometido su ingenio de estudiante tronado y calavera, que cada mañana y cada noche tenía que inventar un nuevo arbitrio para poder bandéarse. ⁶⁴⁾

まず気が付くことは、これだけの文章がたった3つの文から成っている点であろう。①のように関係詞を続けて用いたり、③のように現在分詞による副詞句を連続させたりして長文をつくっている。この点では、紙面の都合上引用は避けたいが、Galdósのような王政復古期の作家の文章に近く、Casaresの言うa)とb)の評価は当たっているようだ。

またさらに気付く点は、②の *derrochara* と *se arruinara* のふたつの接続法過去の用法である。これはガリシア語からきているもので、カステイリャ語ではそれぞれ *había derrochado*, *se había arruinado* と直説法の大過去になるべきものである。このような語法は後にはみられなくなる。

さらに、この文章の中では、②の文において *como* の導く直喩が1箇所でてくるが、Casaresの言うように平凡な比喩である。この *como* の使用はValleの初期の比喩法の特徴といってもよく、*Femeninas* 中には数多く現われるが、次にこれを立証するような文章を同じ短編の中から引用しよう。

④ Aquiles acercóse con aquella dejadez de perdido, que él exageraba un poco, y le desató las bridas de la capotita de terciopelo verde, anudadas graciosamente bajo la barbeta de escultura *clásica, pulida, redonda y hasta un poco fría como* el mármol.

⑤ La otra, siempre sonriendo, levantó la faz, y juntando los labios, *rojos y apetecibles como* las primeras cerezas, alzóse en la punta de los pies.

— Bese usted, caballero.

⑥ El estudiante besó, con un beso *largo, sensual y alegre, como* prenda de amorosa juventud. 65)

この文章からわかるように、ここでは叙述の文④、⑤、⑥のすべてに *como* の導く直喩が現われる。さらにこれに続く文でも、……y de su carne, *fresca y rosada como* manzana sanjuanera, ……と現われる。

このように比喩の多くが *como*、さらには、ここにはみられないが *como si*, *cual*, *cual si* 等から導かれる直喩に頼っている点からして、平凡で詩趣に欠ける文章と言われても仕方あるまい。

しかし、この *como* の使用において気付くことは、その直前にみられるような形容詞の用法である。④の場合は4個、⑤は2個、⑥は3個の形容詞が並んでいる。もっとも、この文章で *como* とそのような形容詞がどの場

合においても一緒に用いられているのは偶然で、必ずしもいつも共に現われてくるものではないのだが。筆者は先に拙論⁶⁶⁾の中でこのような連続した形容詞の用いられ方について調査したが、その結論のひとつは、形容詞を重ねて用いる用法が *las Sonatas* に至る Valle の初期の作品群に共通の傾向であるということだった。

また、④の文の *barbeta* という単語、これはあごの意味で用いられているが、実際にはそのような意味はないから、Julio Casares があげている誤用の一例である。

しかし、*Femeninas* の文章のすべてが以上のようなものではなく、*las Sonatas* において完成される Valle の初期の美学の特徴ともいえるモデルニズム特有の感覚美の追求もみられる。

この傾向は華やかな異国情趣に富んだ *la niña Chole* における描写に顕著で、この中には色彩、音、かおりといった感覚を刺激する要素がふんだんに現われてくる。もっとも、先に述べたように、この作品のかなりの部分は多少の加筆修正ののち『四季の曲』中の *Sonata de estío* に用いられるわけだから、当然とも言える。次にふたつほど文章を引用し、この事実を明らかにしたい。

Allá, muy lejos, en la lontananza azul donde se disipan las horas felices, percibía como en esbozo fantástico las viejas placenterías. El lamento informe y sinfónico de las olas despertaba en mí un mundo de recuerdos: perfiles desvanecidos, ecos de risas, murmullo de lenguas extranjeras y los aplausos y el aleteo de los abanicos mezclándose a las notas de la tirolesa que en la cámara de los espejos cantaba Lili. Era una resurrección de sensaciones, una esfumación luminosa del pasado; algo etéreo, brillante, cubierto de polvo de oro, como esas reminiscencias que los sueños nos dan a veces de la vida . . . 67)

この文章で色彩に関係ある単語をひろくと azul, luminosa, brillante, polvo de oro がみられる。また、聴覚に訴えるものはさらに多く, lamento, sinfónico, eco, risas, murmullo, aplausos, aleteo, notas, cantaba がある。さらに絵画との関係をみると lontananza, esbozo, perfiles がある。また, recuerdos, pasado, reminiscencias といった過去の追憶と関係ある単語は「追想と現在, 希望と郷愁の二重の組み合わせが *Femeninas* の特徴である」⁶⁸⁾ という M. F. Almagro の言葉を想起させる。こ

の回想という表現形式は Valle が好んだもので、その頂点に「ブラドミン侯爵回想録」、すなわち *las Sonatas* がある。

さらに、もうひとつの文章を引用してみよう。

Del mar oscuro y misterioso subían murmullos y aromas a que el blanco lunar prestaba no sé qué rara voluptuosidad. La trágica muerte de aquel coloso negro, el mudo espanto que se pintaba aún en todos los rostros, un violín que lloraba en el gran salón, todo en aquella noche, bajo aquella luna, era para mí objeto de voluptuosidad depravada y sutil... 69)

この文章で色彩と関係あるものは、oscuro, blanco, lunar, negro, se pintaba, luna, 音の方は murmullos, mudo, violín lloraba, そしてかおりを表わすものとして aromas が出てくる。

また、この文章には voluptuosidad が2箇所に出てくるが、これは「選びぬかれ洗練された官能は Valle の神経をゆさぶり、彼を優雅で上品な夢想家に変える」⁷⁰⁾ という Said Armesto の言葉を思いおこさせる。

最後に、上にあげたふたつの引用の中で気付く点は微妙で繊細なものへの嗜好であろう。se disipan, informe, desvanecidos, esfumación のような単語、あるいは lamento, eco, murmullos, aleteo, mudo, violín のような音を表わす単語を見れば、消え入るようなそこはかとなし、ぼんやりとしたものに対し、作家の鋭敏な神経が働いていることがわかる。モデルニズムがある面で Verlaine の「微妙な音楽と繊細な情感」にも負っていることのあらわれである。⁷¹⁾

以上のことをまとめれば、Casares の *Femeninas* の文体についての見方が一面的なもので、王政復古期の作家たちとは全くかけはなれた Valle のモデルニスタとしての側面を見落しているといえる。*Femeninas* の文体には前世代の作家たちのそれとの共通性はみられるが、*las Sonatas* へと向かって展開されていく Valle のモデルニズムがすでにはっきりと現われていると言うことができる。

13. ポンテベドラの Valle, その特異な風貌

Valle-Inclán について語る場合、その特異な風貌を抜きにすることはできない。彼は自らの風貌、特に顔をひとつの芸術作品とみなし、いわゆる文学者らしい顔をつくり上げるのに細心の配慮をした。彼の肖像や写真

を見ると、その長いあごひげが異様な印象を与えるし、他の文学者たちと並ぶ写真を見ても、その奇抜な風貌によりただちに眼が彼の姿に奪われる。このことからして、彼のもくろみは達成されたといえるだろう。

ポンテベドラ時代の Valle は Muruais の話やフランスやイタリアの書物を通して、ヨーロッパの文学者たちの顔がどんな風に仕上げられているか知った。⁷²⁾ しかし、彼は他の人たちが先がけた風貌に追従し模倣することには興味をもたず、独自の顔をつくろうと心がけた。

こうして Rubén Darío が後に有名なソネットの中で「山羊の髭」⁷³⁾ と歌ったその長いあごひげや長髪、鼻眼鏡により、個性的な顔をつくり上げることになる。

Fernández Almagro はこの頃の Valle の風貌がひきおこした次のような面白い挿話を紹介している。

ある日のこと、ポンテベドラの洒落っ気のある人たちが、あたかも Valle に呼ばれたかのような体裁を装い彼のもとに床屋を送り込むという冗談を思いついた。このひやかしは床屋が彼に足蹴にされ階段からころがり落ちるという結果をひきおこした。⁷⁴⁾

数年後 Valle はある不幸な出来事により左腕を失うことになるが、これにより彼の特異な風貌はさらに強烈さを増すことになる。

しかし、Valle はこのようなポンテベドラの生活に住みにくさを感じるようになり、他の多くの文学志望の若者たちのように名声を求め、1896—97年の冬、再び首都へとむかうことになった。(1978.7.)

註

1. 「Valle-Inclán の『四季のソナタ』における形容詞表現について」東京外国語大学 昭和49年度修士論文。
「『聖なる花』における天上的なものと現世的なもののコントラストについて」大阪外国語大学学報第39号(1977), págs. 63—77.
「バリエ＝イン克蘭の前期作品における死のテーマについて」大阪外国語大学学報第41号(1978) págs. 19—39.
2. M. F. Almagro: *Vida y literatura de Valle-Inclán*, Taurus, Madrid, 1966.
3. R. Gómez de la Serna: *Don Ramón María del Valle-Inclán*, Col. Austral, Espasa-Calpe, Madrid, 1969.
4. V. Paz-Andrade: *La anunciación de Valle-Inclán*, Editorial Losada,

Buenos Aires 1967.

5. Valle-Inclán の出生については、1869年あるいは1870年という説もあるが、現在では1866年が通説である。
6. 生地についても Puebla del Caramiñal が Valle の生地ではないかという説があった。Valle 自身、空想を働かせ、Puebla del Caramiñal から Villanueva de Arosa にむかう船の中で生まれたと書いているが、彼の息子 Carlos Luis の証言によれば、Villanueva de Arosa が Valle の生地ということで、また、これが通説になっている。R. Gómez de la Serna, *op. cit.*, págs. 17-18を参照。
7. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 6 .
8. R. Gómez de la Serna, *op. cit.*, pág. 18.
9. 『四季の曲』 *las Sonatas* の主人公。
10. Valle-Inclán : *Sonata de otoño-Sonata de invierno*, Col. Austral, Espasa-Calpe, Madrid, 1975, pág. 51.
11. Valle-Inclán : *Obras escogidas, Tomo II*, Aguilar, Madrid, 1971, pág. 1280.
12. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 165.
13. *Ibid.*, pág. 5 .
14. V. Paz-Andrade, *op. cit.*, pág. 51.
15. Francisco Javier del Valle-Inclán 1736年生まれ。18世紀後半から19世紀の初頭にかけて活躍したガリシアの碩学。サンティアゴ・デ・コンポステーラの聖クレメンテ学院の校長やサンティアゴ大学の教授、その他多くの要職を歴任。
16. M. F. Almagro, *op. cit.*, págs. 6-7 .
17. *Ibid.*, pág. 7 .
18. Valle の少年時代における超自然的なものへの関心については、前掲の拙稿「『聖なる花』における天上的なものと現世的なもののコントラストについて」 págs. 70-71を参照のこと。
19. Valle-Inclán : *Jardín umbrío*, Col. Austral, Espasa-Calpe, 1975, pág. 9 .
20. *Loc. cit.*
21. *Jardín umbrío* にみられる神秘的傾向については、前掲の拙稿「バリエ＝イン克蘭の前期作品における死のテーマについて」 págs. 24-28を参照のこと。
22. Ramón Sender : *Valle-Inclán y la dificultad de la tragedia*, Gredos, Madrid, 1965, págs. 135-136 .
23. R. Gómez de la Serna, *op. cit.*, pág. 23.
24. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 7 .
25. Evaristo Correa Calderón : *La terrible infancia de Valle-Inclán*, Revista de Occidente 15-16, (1966-67), pág. 334.
26. バリエ＝イン克蘭：拙訳「わが姉アントニア」(世界短編名作選、スペイン編) 新日本出版社、(1978年8月), pág. 118.

27. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 6.
28. Valle-Inclán : *Jardín umbrío*, Col. Austral, Madrid, 1975, pág. 146.
29. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 9.
30. V. Paz-Andrade, *op. cit.*, pág. 56.
31. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 9.
32. *Loc. cit.*
33. V. Paz-Andrade, *op. cit.*, pág. 60.
34. R. Gómez de la Serna, *op. cit.*, pág. 20.
35. Valle-Inclán の *Femeninas* 出版以前の作品については William L. Fichter 教授がその *Publicaciones periodísticas de don Ramón del Valle-Inclán anteriores a 1895*, Méjico, Ed. El Colegio de México, 1952 の中で収集している。
36. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 13.
37. Juan Antonio Hormigón : *Ramón del Valle-Inclán, la política, la cultura, el realismo y el pueblo*, Felmar, Madrid, 1972, pág. 113.
38. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 16.
39. V. Paz-Andrade, *op. cit.*, pág. 68.
40. *Ibid.*, págs. 68—69.
41. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 20.
42. *Loc. cit.*
43. Manuel Bermejo Marcos : *Valle-Inclán : Introducción a su obra*, Ediciones ANAYA, Salamanca, 1971, págs. 34—38 を参照のこと。
44. *Ibid.*, págs. 36—38.
45. Valle-Inclán は1921年、メキシコの独立記念百周年祭に際し、メキシコ政府から招待を受け、二度目のメキシコ旅行をしている。これについては M. F. Almagro, *op. cit.*, págs. 195—196 を参照のこと。
46. Alonso Zamora Vicente : *Prólogo de Luces de bohemia*, Clásicos castellanos, Espasa-Calpe, Madrid, 1973, págs. 10—11.
47. M. F. Almagro, *op. cit.*, págs. 25—26.
48. V. Paz-Andrade, *op. cit.*, pág. 54.
49. *Ibid.*, pág. 55.
50. *Ibid.*, pág. 56.
51. Evaristo Correa Calderón, *art. cit.*, pág. 335.
52. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 23.
53. V. Paz-Andrade, *op. cit.*, pág. 71.
54. Víctor Said Armesto : *Un libro modernista*, (前掲の V. Paz-Andrade の著書中に加えられている Apéndice II, pág. 157.)
55. 前掲の拙論「バリエ＝イン克蘭の前期作品における死のテーマについて」 págs. 27—28 を参照のこと。
56. Víctor Said Armesto (1874—1914) 文芸評論家。マドリード大学のガリシア語及び文学の教授。青年の頃 Valle と同じく Jesús Muruais の家に出入りしていた。
57. V. Said Armesto, *art. cit.*, pág. 153.

58. *Ibid.*, pág. 154.
59. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 25.
60. *Ibid.*, pág. 27.
61. *Loc. cit.*
62. *Ibid.*, págs. 27—28.
63. Julio Casares : *Crítica profana*, Col. Austral, Espasa-Calpe, 1964, págs. 49—51.
64. Valle-Inclán : *Obras escogidas*, Tomo II, pág. 1281.
65. *Ibid.*, pág. 1283.
66. 前掲の拙稿「Valle-Inclán の『四季のソナタ』における形容詞表現について」参照のこと。
67. Valle-Inclán : *Obras escogidas*, Tomo II, pág. 1323.
68. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 31.
69. Valle-Inclán : *Obras escogidas*, Tomo II, pág. 1341.
70. V. Said Armesto, *art. cit.*, pág. 155.
71. J. García López : *Historia de la literatura española*, Editorial Vicens-Vives, Barcelona, 1969, pág. 581.
72. M. F. Almagro, *op. cit.*, págs. 32—33.
73. Rubén Darío のソネット *Soneto iconográfico para el señor Marqués de Bradomín*, de Rubén Darío, *su amigo* の第一連に “Este gran Don Ramón de las barbas de chivo ” という verso がある。
74. M. F. Almagro, *op. cit.*, pág. 33.